

# シベリア抑留者の帰還促進運動

——神奈川県足柄上郡の青年同志会の取組——

井上 弘

## はじめに

筆者の手に、平成八年（一九九六）に私家版として刊行された『矛を収めて——在外同胞帰還促進運動の記録——』がある〔次頁図〕。昭和二十二年（一九四七）に神奈川県足柄上郡の青年たちが結成した「引揚復員促進青年同志会」（以降、青年同志会と略す）のリーダーであった鍵和田玄夫<sup>はるお</sup>が、自宅に残っていた青年同志会の活動に関わる資料を一冊の資料集にまとめたものである<sup>①</sup>。

『矛を収めて』はA4判、三七〇頁で次のような章立てになっている。

- 第一章 青年同志会の結成 昭和二十二年五月
- 第二章 足柄上郡海外残留同胞留守家族同盟の結成
- 第三章 神奈川県海外残留同胞留守家族同盟
- 第四章 在外同胞帰還促進全国協議会（全協）
- 第五章 上郡同盟の活動 昭和二十三年五月〜十一月
- 第六章 引揚船舶と各地の残留者

- 第七章 上郡青年団の協力
- 第八章 各種協力と寄附
- 第九章 全国各種団体の活躍
- 第十章 青年同志会研究部の活動 主として昭和二十五年以後
- 第十一章 抑留者の記録
- 第十二章 「異国の丘」作詞作曲シベリア抑留中 吉田 正
- 第十三章 抜粋記事
- 第十四章 戦後史開封 産経新聞 平成六年八月十二日
- 第十五章 同志の記録
- 第十六章 同志会会歌及び外篇（よく歌った歌）
- 第十七章 声なき声語り継ぎ
- 第十八章 相撲甚句

青年同志会は戦後、シベリアに抑留された日本軍将兵たちに対する帰還促進運動を行なったグループである。

シベリア抑留とは、終戦直後、ソ連軍管理下（満州、北緯三八度以北の朝鮮、樺太、千島列島）の日本軍将兵や軍属など約六十万人がソ連軍に強



『矛を収めて』の表紙

制連行され、長期間の収容所生活を強いられ、極寒・飢餓・重労働（いわゆる三重苦）の中で約六万人が亡くなったことをいう<sup>②</sup>。復員は昭和二十一年（一九四六）から始まり、最終的には昭和三十一年（一九五〇）まで行なわれた。シベリア抑留の収容所はシベリアだけでなく、東の樺太から西の黒海近くまでのソ連領内と、モンゴル領内の広範囲にわたっていた。抑留されたのは日本人だけでなく、独ソ戦で捕虜となったドイツ軍将兵など四百万人以上に及んだ。シベリア抑留の実態については体験者による手記が数多く出版されており、それらの手記を通して知ることができる。

帰還促進運動とは、多くの日本軍将兵や軍属が強制連行され収容所に入れられたことを知った留守家族や地域住民が、帰還促進や留守家族への生活支援に取り組んだ戦後の運動である。帰還促進運動に取り組んだ主な全国組織としては、昭和二十二年に結成された「在外同胞帰還促進全国協議会（全協）」がある。

シベリア抑留については、その詳細は知らなくとも、何であるかはおよそ知られるようになってきた。中学校歴史教科書を見ると平成元年（一九八九）以前は、ほとんど触れられることがなかったが、現在ではほとんどの教科書で紹介されるようになった<sup>④</sup>。さらにテレビでシベリア抑留が取り上げられることも多くなり<sup>⑤</sup>、人々の認知度は高まってきている。しかしながらシベリア抑留者の帰還を待つ家族や地域が、どのようにその問題に向き合っていたのかはほとんど知られておらず、本稿では帰

還促進運動が行なわれた地域の一つの事例を取り上げて、その実態を明らかにしたいと思う。また、運動の主体となった青年たちが、どのような想いで運動と関わったのかを明らかにすることで、占領期の青年の動向についても検討したい。

## 一 先行研究

帰還促進運動がどのように扱われているのか、該当地区の市町史の通史編を確認してみよう。運動の中心地であった松田町の町史<sup>⑥</sup>では帰還促進運動自体、全く触れていない。隣接する南足柄市の市史<sup>⑦</sup>でも同様である。

該当の足柄上郡に隣接する小田原市の市史<sup>⑧</sup>では、小見出し「復員・引揚げと遺族会」（六四一～六四五頁）で、朝鮮人や中国人の帰国問題を含めて兵士の復員や戦地からの引揚げを扱ってはいるが、シベリア抑留や、帰還促進運動についての具体的な記述はない。

神奈川県史<sup>⑨</sup>では、「敗戦により外地からの軍人軍属の復員、引揚げが始まったが、その数は、一九四七年末までで十七万四千人に及んだのである」（五四四頁）の記述だけである。

一般書の通史ではどうかであろうか。筆者の手元にある、いくつかの通史を紐解いてみよう。昭和五十年（一九七五）に出版された藤原彰編『日本民衆の歴史10 占領と民衆運動』<sup>⑩</sup>では「引揚者援護のための団体もつくられたが、その多くは政治的目的をもつものか、官庁や自治体の外郭団体で、十分な引揚者対策をすすめるにはいたらなかった」（三七七頁）と簡単に触れられているだけである。

昭和五十八年（一九八三）に出版された神田文人著『昭和の歴史』 8

占領と民主主義』<sup>11</sup>では、小見出し「シベリア引揚者問題」(二七一〜二七三頁)を設定し、シベリアからの引揚げの経緯について記述しているが、帰還促進運動には触れられていない。

平成二十一年(二〇〇九)に出版された大門正克著『全集日本の歴史第十五巻 戦争と戦後を生きる』<sup>12</sup>では、帰還促進運動については触れていないが、第五章「戦争の終わり方と東アジア」での小見出し「引き揚げと復員」(二三三〜二三九頁)で、①戦地や外地からの引揚げに対して、日本政府が組織的に取り組んだ形跡がないこと、②引揚げてきた日本人の中で、アメリカ軍政下の沖繩の人たちが故郷・沖繩に容易にたどり着けなかったこと、③引揚げへの関心は高く、関心が消えていくのは高度経済成長期ごろだったこと、④日本から朝鮮人や中国人が引揚げることは関心の範囲外であったことなど、終戦後の引揚げと復員に関する問題を挙げている。

帰還促進運動そのものだけを扱った研究書については、管見の限り見あたらないが、富田武氏は『シベリア抑留者たちの戦後 冷戦下の世論と運動 1945-56年』の「第二章 抑留報道と帰還者運動」と「第三章 共産党と帰還者運動」で詳しく触れている。帰還促進運動について「引揚者と家族の運動は、大きくは、まず留守家族の帰還促進運動が先行し、南太平洋等からの帰還に伴い、これを支援する国会議員やヴォランティアの活動が続ぎ、やがて帰国した引揚者が合流し、中心となる帰還促進と生活擁護の運動になったと見ることができると、運動の大きな流れを指摘している。

また、抑留の当事者であるソ連と当時密接な関係があった日本共産党の対応について、共産党系組織として活動した「ソ連帰還者生活擁護同盟」

を取り上げ、帰還促進運動がより政治化したことにより、昭和二十五年(一九五〇)に勃発した朝鮮戦争下で主導権が保守派に移っていった過程を明らかにしている。

栗原俊雄氏は、『シベリア抑留——未完の悲劇』の「第5章 帰国」で、抑留者の帰国後の問題について論じている。帰還促進運動についてはほとんど触れていないが、「帰ってから長い間、シベリアのことは話さなかった。そう振り返る帰還者が多い。忘れてしまいたい記憶であることに加え、話すことによつて一層の不利益をこうむることが分かっていたからだ」と、シベリアでの抑留生活を乗り越えて帰国したにもかかわらず、「シベリア帰りはアカ」などと言われ、帰国後の日本においても新たな苦しみ待ち受けていたことを指摘している<sup>15</sup>。さらに、「アカデミズム識者の批判はソ連に向かわなかった」と、ソ連による国家的犯罪に目を向けなかったマスコミや知識人の問題にも言及している<sup>16</sup>。

吉田裕氏は、『兵士たちの戦後史』<sup>17</sup>で、復員兵士の視点から、抑留者の帰国について、「個々の家族は、彼らを暖かく迎え入れた」<sup>18</sup>が、「社会全体の復員兵に対する態度は冷ややかなものだった」とし、「復員した兵士たちが直面した最大の課題の一つは就職難、生活難の問題だった」<sup>20</sup>ことを指摘している。

長勢了治氏は、『シベリア抑留全史』<sup>21</sup>の「第一六章 引揚げ促進運動と抑留者運動」で帰還促進運動に言及している。シベリアに抑留されて帰国できずにいる息子をもつ大木英一が昭和二十一年に結成した「在外将兵帰還促進連盟」を取り上げて、初期の帰還促進運動や、二十二年に中央組織として結成された「在外同胞帰還促進全国協議会(全協)」などを紹介し、全国的な運動の経緯についてまとめている。

小野英夫氏は、「在外同胞抑留者シベリア地区引揚促進運動回顧録」<sup>(22)</sup>で、千葉県の留守家族代表として帰還促進運動に関わった山田村雄が残した回顧録を通して、シベリア抑留の実態が分かっていたいなかった当初の千葉県での帰還促進運動について、その様子を明らかにした。さらに同氏は山田村雄の息子（山田慶太郎）への聞き取りを行ない、シベリア抑留から帰還までについて証言としてまとめている。<sup>(23)</sup>

シベリア抑留を担当した厚生省（現、厚生労働省）は、この問題についてどのように対応したのであろうか。平成九年（一九九七）に同省社会・援護局から刊行された『援護50年史』<sup>(24)</sup>では、帰還促進運動に関しての記述はないものの、「未復員者等の援護」の見出しで、法律による援護について記述している。<sup>(25)</sup>

それによれば、昭和二十二年の未復員者給与法で、未復員者に対しては俸給等の支給措置を行ない、扶養親族に対しては扶養手当（扶養親族一人当たり月額一五〇円）を支給することとした。俸給の支給にあたっては、未復員者へ階級のいかんにかかわらず一律に月額一〇〇円（昭和二十六年一月から一〇〇〇円に増額）とし、本人が帰還した時にまとめたの支払いとなっていたが、留守家族の生活が困難になったことを考慮し、昭和二十五年四月からは留守家族へ前渡しすることにした。

さらに昭和二十八年には、未復員者給与法を廃止して、新たに「未帰還者留守家族等援護法」を制定し、留守家族手当の増額、帰郷旅費の支給、遺骨埋葬経費の支給など、留守家族を援護するという見地に立った措置を講じた。

最後に、斎藤六郎氏の『シベリア捕虜志——その真因と全抑協運動——』<sup>(26)</sup>と、小熊英二氏の『生きて帰ってきた男——ある日本兵の戦争と

戦後』<sup>(27)</sup>は、両書とも帰還促進運動そのものについては扱っていないものの、シベリア抑留者の戦後を考える上では外せない研究書である。

前者は、シベリア抑留体験者の著者が、自身の抑留体験を赤裸々に語り、帰国後に会長として精力を傾けて取り組んだ「全国抑留者補償協議会（全抑協）」の活動の歩みをまとめたものである。

後者は、社会歴史学者の著者が、シベリア抑留者であった父の戦前・戦中・戦後の人生を、父への聞き取りを通してまとめたものである。特に父が人生の最後に取り組んだ戦後補償裁判（第九章）は、シベリア抑留がどのような意味をもっていたのかを考える上で貴重な記録である。

以上、帰還促進運動について管見の限り、関連の研究も含めて見てきた。それらの多くは全国的に展開された運動の概要に留まっており、全体の動きについては分かるものの、地域の個別的な運動についてはほとんど扱っていない。運動の歴史的価値を考察するためには、俯瞰的に全体を見ると同時に、運動の個別的な事例研究を積み上げていく必要がある。そうした意味で、地域の一つの運動を取り上げて帰還促進運動の具体的な取り組みを見ていくことは価値あるものであり、本論のねらいでもある。

## 二 引揚復員促進青年同志会の結成

青年同志会は、昭和二十二年五月十八日、松田町立松田小学校講堂で結成大会を行なった。結成大会直前の五月に入って、結成に向けての準備活動が開始された。五月四日には青年同志会の中心メンバーとなる鍵和田玄夫・山口利雄・渋谷秋三・関野由春の四名が、準備会ともいえる「松風会」を名乗って松田町役場を訪れ、町議会へ協力を要請した。五日

には南足柄町で開催されていた大口競馬の会場で一般の人々に向かつてシベリア抑留者の救出を呼びかけた。七日には松田町青年団幹部と一緒に二〇名で町役場会議室で協議し、十二日に足柄上郡青年団長会議に向いて協力要請をし、小田急の新松田駅前で署名活動を行なった。十三日には松田町婦人会へ結成大会への出席を依頼した<sup>(28)</sup>。

結成大会に向けてのこうした直前の準備活動で注目する点は、松田町当局と青年団へ協力を依頼したことである。このことは、青年同志会が町当局と連携して運動を進めていこうとの表われであり、青年団との接触は、運動の主体となる会員を青年団組織から得ていこうとの思惑だったのであろう。

五月十八日の結成大会では次のように呼びかけた。少し長いが青年同志会結成への想いが表われているので、全文を紹介する。

同志諸君へ

全同志並びに青年男女諸君!! 身も心も打ちひしがれた我が同胞を救ふ道は何でありますか。それは熱烈なる我々青年の愛情より外にないのであります。

理想に燃える同志並びに男女青年諸君!! 衣服財宝を以て総てとし、階級闘争を以て人生の第一義とし、彼れ我れを搾取せば我れ彼れを殺戮せんと云ふ人達の靈魂を無視する思想は私達の絶対にとる所ではありません。悶えつつある同志諸君、道は近きにあり、我々の進むべき道はその沸々たる熱情を以て、愛情を以て総ての同胞を励まし育てる事です。

幾百万の同胞の骨は枯れ、然も百数十万の同胞は外地にて諸君の

声を聞こうとして耳をそば立てて、温かい手を受けるべく待ちこがれているのです。諸君!! 諸兄こそ日本の救世主であります。

前途に光明を認め伝来の民族の使命を全うしようではありませんか!! 我々同志は迷つてはなりません。我々が迷つたら民族は滅亡の外ありません。同志並びに男女青年諸君の自重奮起を要望します。我を信じ我々のなさんとする所のものを徹底的に反省し、且つ信じ、大いなる前途の為如何なる困難をも克服し、米國、英國、ソ連、中國ならぬ日本を作ることです。

又話しをかへて一般来場者の人々に申し上げます。街頭で此の運動にお呼びかけしてから、約二千に及ぶ連名簿の署名を戴き、深く感謝しております。本日のお話しをお聞きになった上よろしくこの青年大会に御期待と御支援をお願いします<sup>(29)</sup>。

シベリアに抑留されている軍人・軍属を「身も心も打ちひしがれた我が同胞」と言い、救出する道は「熱烈なる我々青年の愛情より外にない」と声高に叫んでいることに青年同志会の意気込みを感じる事ができる。と同時に、次の段落で共産主義思想に対する敵視ともいえる表現を用いている。この共産主義アレルギーともいうべき考えは、青年たちが戦前に受けてきた教育のある種遺産であり、青年たちのソ連に対する姿勢を表わしているともいえる。

また、「米國、英國、ソ連、中國ならぬ日本を作る」と、先の戦争で勝者となった四ヶ国とは異なる新たな日本の建設を誓っていることに、勝者に反発をもつ、敗戦国の青年たちのある種意地ともいえる複雑な感情をこの一文から見いだすことができるだろう。

結成大会では、会長に鍵和田玄夫、副会長に山口利雄が就任し、鍵和田は代表挨拶で「飲食の友、歓談の友を排し、苦節を共にする純情と互に愛し、尊敬し合い、忠告し合う友があります。我々の前途は祖国の混迷のさ中であつて明るく輝いています」と、高らかに宣言した。<sup>30</sup>

鍵和田玄夫の会長就任について、青年同志会で一緒に活動した田辺光雄は「志を同じうする青年達が相集うて鍵和田先輩を中心として結成された」と、当然であつたことを語っている。<sup>31</sup>

結成時の会員数は二七名で、内訳は男子二四名、女子三名である。理由は分からないが、「松風会」のメンバーだった関野由春は入っていない。結成大会で示された「引揚復員促進青年同志会々則」<sup>32</sup>を見てみよう。

五ヶ条からなる簡単なものだが、第一条では会の名称。第二条では本部を「松田公共職業安定所内」に置くこと（二名の会員の勤務先を本部としたことが別の資料で分かる）。第三条では目的として「本会は熱烈なる同胞愛により海外残留同胞の速やかなる帰還を促進せしむる様努力し、其の家族を援護すると共に本運動を通し相互の知徳の向上と親睦を計り以て祖国の再建に邁進する」ことを挙げている。シベリア抑留者の帰還促進や留守家族支援の第一義的な目的の他に、会員相互の高め合いや親睦を挙げている点に注目したい。このことから、代表挨拶で「飲食の友、歓談の友を排し」と鍵和田が述べたように、会を遊興的な集まりではなく、運動を通してお互いを高め合う集団にしていこうとの志を読み取ることができる。第四条では事業内容として、①「留守宅援護」②「復員促進運動」③「同志相互の知徳の向上」の三点を挙げている。第五条では正会員を足柄上郡の青年男女に限定し、趣旨に賛同する賛助会員も認められている。

### 三 運動の主体となった青年たち

青年同志会の運動の背景として、終戦後の青年団運動<sup>33</sup>に代表されるように、戦争の時代を経てきた青年たちには、戦後の地域社会を担おうとしたエネルギーシユな想いがあつたと思われる。

そのエネルギーシユな想いを探るため、ここでは運動の主体となった四名の青年たちが、どのように戦争の時代を過ごしてきたのかを確認したいと思う。

会長の鍵和田玄夫、さらには「同志会三人柱」<sup>34</sup>と言われた山口利雄、田辺光雄、伊集院兼重の四名は、いずれも旧制小田原中学校（現、県立小田原高校）の出身である。鍵和田は昭和十二年入学、途中で陸軍幼年学校さらに陸軍士官学校へと進み、終戦時は二〇歳である。山口は十一年入学、終戦時は二一歳。田辺は十八年入学、終戦時は一五歳。伊集院は二十年四月に横浜の中学校から二年生に編入してきており、終戦時は一五歳である。

鍵和田と山口の中学校時代は、日中戦争が勃発し、アジア太平洋戦争が始まる日米開戦までの時期にほぼ相当する。日中戦争勃発後の昭和十二年八月には近衛内閣によつて国民精神総動員運動<sup>35</sup>がスタートし、県知事の指示によつて、小田原中学校でも「朝礼の時必ず宮城遙拝を行うなどあらゆる機会に敬神崇祖の訓練を行い、体操・教練・武道の振興をはかるとともに、修学旅行や運動会などの学校行事には困苦に耐える精神を錬成し、神社や校庭の清掃などの勤労奉仕の実践に一層つとめ、質素を旨として消費を抑制し、貯金や献金を奨励することなど」<sup>36</sup>が取り組

まれた。

翌年には「余暇に国家や社会に奉仕し貢献する」ために、小田原中学校青年団が結成された<sup>(37)</sup>。教室の壁には「生活訓育綱領」と「生活訓育日課表」が貼られて、日本精神の昂揚が叫ばれ、登校してから下校するまでの細かな生活態度が示された<sup>(38)</sup>。また、この年から四年生は箱根の畑宿にあった「箱根報国寮」<sup>(39)</sup>に一週間入寮し、「団隊生活」<sup>(40)</sup>を営みながら、勤労を通して心身を鍛え、質実剛健な中堅国民<sup>(40)</sup>を目指した。

こうした戦時体制下での中学校時代を過ごした鍵和田や山口は、出征する先輩たちを見送ったり、戦死者の遺骨を迎えたりしたのである<sup>(41)</sup>。鍵和田が途中で、陸軍幼年学校、さらには陸軍士官学校へ進んだのも自然なことであった。

田辺と伊集院が、三年生、二年生として中学校生活を送っていた昭和二十年四月、沖繩では米軍との地上戦が始まった。地元の足柄平野では本土決戦部隊が駐留し始め<sup>(42)</sup>、それ以降終戦まで小田原地方の上空は米軍の戦闘機が飛び回る状況だった<sup>(43)</sup>。二年生以上は勤労働員として県内の軍需工場へ出勤しており<sup>(44)</sup>、六月十一日には四年生全員が動員されていた日本光学工業川崎製作所が米軍戦闘機P51ムスタングによる空襲を受け、生徒の鍵和田武男が犠牲となつて亡くなった<sup>(45)</sup>。一年生は、軍需工場への動員ではなく、小田原市郊外の久野の威張山で、駐留していた本土決戦部隊の歩兵一九九連隊の兵士とともに陣地構築を行なっていた。

青年同志会の中心メンバーであった四名の戦争の時代について見てきたが、彼らの少し上の世代は戦地へ駆り出され、戦死した者も多く、生き残った者もすぐには復員することはできず、中にはシベリアへ強制連行され抑留を強いられた者もいたはずである。そうした先輩たちに対し

て、年齢が兵士になるには若すぎたために戦地へ行くことがなかった彼らがある種の負い目を感じていたことは想像できよう。その負い目こそが、彼らを帰還促進運動に向かわせたのではないだろうか。

#### 四 青年同志会の取組

##### (一) 留守宅援護

##### 一 留守家族の組織化

シベリア抑留者の留守家族を支援するにあたって、まず青年同志会が取り組んだことの一つは留守家族の組織化であった。昭和二十二年五月十八日の青年同志会結成三ヶ月後、八月二十日に「足柄上郡海外残留同胞留守家族同盟」(以降、家族同盟と略す)が結成された。

結成大会で行なわれた経過報告<sup>(46)</sup>の中に、「その折に東京都銀座四丁目教育会館ビル八階に『南方残留同胞引揚促進全国家族同盟本部』なるものが存在する事が判つて同志会と致しまして此の運動をより効果あらしめる為に上郡を一丸とする所の未復員家族からなる同盟の設立を考えたいわけであります」との記述がある。青年同志会が集めた署名簿を関係機関に提出するため六月十七日に会員で上京した時のことである。このことから青年同志会が家族同盟設立に関わったことが分かる。

家族同盟設立にあたって、七月六日、七月十四日、七月二十八日の三回、郡下各町村の関係者による家族同盟結成準備会を開催している。さらに、三回目の準備会の日、地元松田町の永山治四郎町長は、足柄上郡の町村が家族同盟設立に賛同し協力すべきだとの内容の書簡を足柄上郡町村会

長宛に送付した。<sup>47</sup>

三回の準備会を経て、松田町立松田小学校講堂で家族同盟の結成大会が開かれた。足柄上郡一八町村のうち、結成段階では半数の九町村（岡本村、金田村、桜井村、福沢村、上秦野村、相和村、清水村、共和村、松田町）が参加し、未参加は九町村（中井村、寄村、三保村、吉田島村、北足柄村、南足柄町、曾我村、酒田村、山北町）であった。

家族同盟の事務所は松田町の寒田<sup>さむた</sup>神社社務所内に置かれ、理事長には松田町の藪田喜作が就任した。「足柄上郡海外残留同胞留守家族同盟規約（案）」<sup>48</sup>の第三条で「本同盟は南方、北方残留同胞の可及的速かな引揚完了を達成すると共に家族相互の援助並に一般の啓蒙運動をなすを以て目的とする」とし、第十一条で「本同盟は目的達成の為、引揚復員促進青年同志会と密接なる協力をする（後略）」と、青年同志会の名前を挙げている。

家族同盟の目的は、ほぼ青年同志会の目的と重なり、青年同志会の会長・鍵和田玄夫が副理事長に就任し、総務部長を兼ねた。また、顧問には地方事務所長、警察署長、公共職業安定所長、各町村長、各町村議長が就いた。まさに、青年同志会の別動隊ともいえる組織であり、行政を巻き込んでいたことが大きな特徴である。「足柄上郡下に於ても未帰還者五百名を数へ、二千に及ぶ留守家族」<sup>49</sup>を会員とする組織の誕生であり、結成と同時に多くの入会者がいたことが、『矛を収めて』<sup>50</sup>に載っている多くの「入会申込書」で確認することができる。

結成大会終了後、同会場で「留守家族慰安会」<sup>51</sup>が開催され、楽団演奏、歌、舞踊、浪曲、漫談など数多くの演芸が催された。

家族同盟は結成と同時に、全国組織への加入を決めた。家族同盟の結

成のきっかけとなった「南方残留同胞引揚促進全国家族同盟本部」に加入したものの、その全国組織が解散してしまったことにより、昭和二十二年十月に結成された「在外同胞帰還促進全国協議会（全協）」に改めて加入した。神奈川県下では最初の加入団体であった。

こうして青年同志会と家族同盟は、足柄上郡のシベリア抑留者の帰還促進運動の両輪として活動していくことになる。ただし、理由は定かでないが、家族同盟は、昭和二十三年五月二十日、会の名称を「足柄上郡在外同胞引揚促進同盟」（以降、促進同盟と略す）に変更した。

さらに足柄上郡での先進的な帰還促進運動組織である家族同盟の存在は、県下各地での留守家族の組織化へとつながっていく。全県下を網羅した「神奈川県在外同胞引揚促進同盟」の結成である。その結成大会は同年十月十五日に横浜市野毛山公園市役所脇で行なわれ、司会を鍵和田玄夫が務めた。近隣では、小田原市と足柄下郡に支部が誕生している。<sup>51</sup>

## 二 留守家族慰安

昭和二十二年八月二十日の家族同盟結成大会後の留守家族慰安会に続いて、翌年の三月十四日と八月二十二日の二回、家族（促進）同盟と青年同志会の共催で行なわれた促進大会の後に、「留守家族慰安会」が実施された。

三月十四日の慰安会を紹介してみよう。午前九時から松田町の金時座（映画館）が会場である。会の名称は「海外残留同胞引揚復員促進大会並に留守家族慰安会」で、主催は家族同盟と青年同志会、後援は全協、松田町ペンクラブ、松田町青年団、足柄上郡引揚者連盟、松田町婦人会である。受付、整理、マイク、進行など運営上の役割のほとんどを青年同



志会が受けもった。午前中に大会を済ませて、昼食後に慰安会を実施している。慰安会のプログラムを見ると、出し物は爆笑漫才、奇術、浪曲、小唄などであり、留守家族が一堂に会し食事をして楽しんだことが分かる。

戦後のこの時期は、全国各地で青年団による演芸会が盛んに行なわれており、<sup>(53)</sup> 演芸で留守家族をもてなした慰安会の実施は、郡下の青年団員を会員に擁した青年同志会ならではの取り組みであったといえる。

### 三 就職斡旋

前述した先行研究で指摘されているように、復員した兵士たちが直面した最大の課題の一つは就職難であった。この復員兵士の就職斡旋については、『矛を収めて』では特に言及してはいないが、留守家族の就職斡旋については、事業計画の中で「家族の中、職につきたい希望がある場合は、山口利雄、高橋両同志に相談すること」と記している。<sup>(54)</sup> 松田公共職業安定所に会員の山口利雄と高橋正利が勤めていることと、家族同盟の顧問に松田公共職業安定所長が名前を連ねていることを最大限に利用している。ただ、具体的に留守家族への就職斡旋をどのように進めたのか、具体的なことについては『矛を収めて』からは見つけることはできない。

## (2) 帰還促進運動

### 一 陳情活動

昭和二十三年三月十四日の促進大会では、「本年度内に絶対に引揚を終

らねばならぬ」と青年同志会の鍵和田が演説をした。さらに「夫を待つ私」の題名で留守家族が話し、「在外同胞の気持」を帰還したシベリア抑留者が訴えた。昼食をはさんで午後から留守家族慰安会が行なわれ、最後に次の五点の決議が採択され、この決議をもつて米英ソ中の四ヶ国、ローマ法王庁、日本政府（首相・外相・厚相）、神奈川県知事への陳情を決定した。

一、月二十万の帰還促進実現と併せて生死不明者特に生存者氏名（特にソ連地区）の発表

二、中国共産党地区抑留者の帰還実現

三、未復員者並に一般抑留者を国家公務員として保証待遇すること

四、留守家族の生活援護の為一切課税の軽減並に優先就職

五、留守家族生活援護金の増額（月一人五〇〇円）

同様の促進大会並びに慰安会は、同年八月二十二日にも促進同盟と青年同志会の共催で実施され、同じように決議をもつて陳情した。この時の陳情に対しては、ローマ法王庁と神奈川県知事から受領したとの「返事」が残っている。<sup>(55)</sup>

こうした陳情活動は家族（促進）同盟と青年同志会にとって帰還促進運動の大きな柱であった。

### 二 帰還促進運動の掲示板

青年同志会では、国鉄御殿場線松田駅と小田急新松田駅の改札横に「引揚促進青年同志会掲示板」を設置し、足柄上郡内のシベリア抑留者の帰

還状況を掲示した。掲示板による啓発活動だが、掲示板を担当していた小嶋光雄は「駅の乗降客が立ち止まり、振り返って読んでいた」「異国の丘<sup>56</sup>が発表され、その歌詞を、いちはやく掲示した」「シベリア抑留の家族の人だと思うが、よく掲示板を見に来る人が何人か、きまっていた」などと当時の思い出を記している<sup>57</sup>。

### 三 展覧会の開催

昭和二十三年七月三十一日から八月一日の二日間、寒田神社境内で「ソ連抑留満蒙引揚状況スケッチ展」と称した、シベリア収容所の生活などを描いたスケッチ展を開催した。同二十二年八月から二十三年十月まで、全国各地で開催されたスケッチ展覧会の一つである。展示したのは満蒙引揚文化人連盟に所属し、シベリア抑留を体験した画家たちが制作した一八〇枚のスケッチである。

開催にあたって、促進同盟と青年同志会の連名で、足柄上郡の町村長・民生委員長・婦人会長・青年団長宛に来場依頼の通知を出している。会場の役員（受付・監視・連絡責任者）一覧に記載された一六名のほとんどが青年同志会のメンバーであり、このスケッチ展が実質的には青年同志会によって開催されたといえる。

なお、スケッチ展では一般が二円九〇銭、学生が二円の入場料を徴収している。その入場料は展示に使用されたスケッチの賃貸料などに充てたと考えられ、満蒙引揚文化人連盟から青年同志会宛の三九五五円（内訳、スケッチの賃貸二日分として三〇〇〇円、委託書籍新聞代として九五五円）の受領証が残っている<sup>58</sup>。この受領証に記載された金額から、全額が入場料ではないにしろ、かなり多くの入場者があつたものと推察できる。

会場で監視を担当した田辺光雄は、青年同志会の活動で「鮮明に記憶に残っている事柄」として、このスケッチ展開催を挙げている<sup>59</sup>。

### 四 復員者を囲む会

シベリア抑留者の帰還促進を主として活動してきた青年同志会だが、帰還できた復員者への対応はどうだったのだろうか。昭和二十三年六月二十九日付けの鍵和田から会員へ出された「同志会七、八月の予定<sup>60</sup>」には、七月十七日の午後八時から十時三十分までの予定で「復員者を囲む会」を行なうことが記されている。出席する復員者として山北町、南足柄町、松田町から各一名の氏名が書かれている。

この会の具体的内容を知ることができる資料は見あたらないが、三名の復員者からシベリア抑留の体験を聞き、帰国後の要望を聞いたであろうことは想像できる。

### (3) 同志相互の知徳の向上

青年同志会の「会則」第四条で事業内容の一つとして「同志相互の知徳の向上を図る為、知名人有徳の人士を招き、高話<sup>61</sup>を聞き、或いは研究会講演会討論会をなす」としている。

その活動の場が研究部であり、『矛を収めて』の「第十章 青年同志会研究部の活動」で、どのようなことを行なったのかを知ることができる。

青年同志会の顧問の一人に伊集院兼雄がおり、その当時、松田町在住で朝日新聞の記者をしていた。伊集院兼雄は兼重の父親であり、戦争末期には京城（現、ソウル）に赴任していた。兼重は「やがて終戦、（中略）

父も韓国から戻って東京本社へ通勤するようになりました。その父のところへ訪ねて来られたのが鍵和田氏、山口氏達でした。寒田神社の祭礼の夜、一杯機嫌で私の家に押し掛けて来られた青年の方々を、家族には気難しい父が飲めない酒のお相手をし、割り箸をバイオリンに見立てて引く様子を今でも覚えています。(中略)その後、父が同志会の顧問的存在として青年の方々とお付き合いをしていた関係で、私も同志会の行事のお手伝いをしました。」と記している。<sup>(62)</sup>

新聞記者はある種の知識人であり、「会則」第四条の「知名人有徳の人士を招き、高話(マヤ)を聞き」に行った一人が伊集院兼雄だったのかもしれない。

ほかに、小田原高校の社会科教員であり郷土史家の中野敬次郎を招いて、足柄上郡の歴史について講義をしてもらったり、地元選出の衆議院議員の小金義照<sup>(63)</sup>からポツダム宣言の歴史的経緯について学んだりしたことが記されている。<sup>(64)</sup>

ポツダム宣言については、多くの先行研究でその第九条がシベリア抑留を行なったソ連の不当性を示す一つの根拠となっていたことを指摘している。第九条には「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ」と書かれ、青年同志会のメンバーも小金義照の講義によって、この条文については認識していたはずである。

鍵和田が研究部の「三人柱」と称した一人の伊集院兼重は、研究部について『フィヒテの独逸国民に告ぐ』の輪読会への参加、慣れない手つきでガリを切って松田小学校へ印刷に出かけたことなどを断片的に記憶している<sup>(65)</sup>と記している。フィヒテはドイツの哲学者であり、『ドイツ国

民に告ぐ』は、ナポレオン一世によるベルリン占領下で一般大衆向けに行なわれた講演をまとめた代表的な著作である。フィヒテの講演内容に、青年たちはアメリカによる占領下の日本の姿を重ね合わせたのかもしれない。伊集院兼重によれば、研究部会の会場は多くが鍵和田の自宅であり、輪読した書籍は数多く、一番印象に残っているのが『ドイツ国民に告ぐ』であつたという。<sup>(67)</sup>

さらに青年同志会での研究部会だけでなく、伊集院兼重は東京へ出かけて行って、大学生たちによる引揚げ支援団体であつた日本健青会<sup>(68)</sup>の学習会に参加したと語っている。このことは東京の青年たちによる帰還促進運動団体と連携していたことを物語っている。

「三人柱」の一人、田辺光雄は研究部での討論について「これは我等会員にとつても自己啓発の場としても重要な場であつた。同世代の若人が討論しトコトン意見を出し尽くす。一度方針が定まるや全力を奮つて目的達成に奮闘する。事成るや真剣なる反省の機を持ち次期の跳躍のバネに資する」と記している。<sup>(70)</sup>

また、『研究部日誌』(昭和二十三年一月二十四日～二十四年一月二十九日)が翻刻されており、部会の具体的な内容が分かる。部会はほぼ土曜日の夜に設定され、午後七時もしくは八時から始めて四時間という長時間に及んだ。ある日の「日誌」を見てみよう。

(昭和二十三年)三月五日(金) 雨後曇

一、会場 金田村□□寺 「□は判読不能」

二、出席者 山口、小島光、田辺、鍵和田

三、議題

1、共産主義批判

2、仏教論

3、宗教論

4、教育改革—方法論

四、時間

一、午後八時ヨリ同十二時マデ

一、本日ハ事業部計画ノ発表（復員業ム、家族同盟ノ事）ト雑話

ニ若干時間ヲ割キタリ 尚、民族復興問題ハ山口氏ノ都合ニ

ヨリ次回ニ繰超ス

澁谷記

議題についてどのような討論がなされたのか「日誌」からは分からないが、残された「日誌」の記述からは、青年たちが日本の将来について真剣に語り合っていたことが浮かんでくる。

(4) 他組織との連携

一 青年団

青年同志会の活動の随所に青年団との連携を見いだすことができる。『矛を収めて』の「第七章 上郡青年団の協力」には地元(72)の松田町青年団が青年同志会に協力をしたこと(73)の資料が散見できる。青年同志会が積極的に進めていた促進同盟の会員募集での協力である。松田町青年団文化部長の藪田壽生が各文化部委員へ送った「在外同胞引揚促進運動協力について」(昭和二十三年六月十三日付)が載っている(74)。そこには青年同志

会から協力の申し出を受けて青年団役員会で協議した結果、「一般家庭を対象に、町内約一千の会員を必要とすること」を文化部委員へ訴えている。

青年同志会結成時のメンバーでもあった北村重輝は、結成前の昭和二十一年に松田町青年団の二代目団長となっていた。北村は「当時の松田町の人口一万名足らずに対して、青年団員は一時期一、〇〇〇名を上廻った」とし、多くの若者が青年団に入った理由を「終戦によつて軍隊からの復員、或は軍需工場の閉鎖等により離職した若者達が、一時に巷に溢れるようになったが、食糧にもこと欠く戦後の荒廃の中、生活再建に励む一方で、若さのエネルギーが青年団に向けられたのは、極めて自然のことであつたのかも知れない」と当時の松田町青年団について記している(75)。

この会員募集の協力では、松田町青年団だけでなく、足柄上郡全町村の青年団が協力したものと思われる。促進同盟理事長名で、各町村青年団長宛の感謝を表わす書簡が残っている。

二 諫早青年同盟

諫早青年同盟は長崎県諫早市で結成された青年団体で、青年同志会と同じように、地域の青年が中心となつてシベリア抑留者の帰還促進運動を行なっていた。活動の詳細については不明だが、『矛を収めて』の「第七章 上郡青年団の協力」に、諫早青年同盟から鍵和田玄夫宛の昭和二十二年にやり取りした一〇通のハガキと一通の書簡が載っている。ハガキや書簡の主な内容は、嘆願書に添付する署名集めの依頼である。

また青年同志会の「会則」では、第四条で実施する事業の一つとして「復員促進運動」を挙げているが、その中で「同目的団体と協力す」ること

を示しており、その団体の一つに諫早青年同盟を列記している。このことからもすでに結成段階で諫早青年同盟との連携を目指していたことが分かる。

こうした遠方の同じ目的をもった青年組織との連携は、青年同志会の活動視野が、足柄上郡という地域だけに向かつていたのではないことを表わしている。

### 三 在外同胞帰還促進全国協議会（全協）

全協が結成されたのは昭和二十二年十月であり、足柄上郡からは家族同盟が参加団体名簿<sup>74</sup>に名を連ねている。しかし不思議なことに代表者は家族同盟理事長の藪田喜作ではなく、副理事長で青年同志会会長の鍵和田玄夫になっている。

『矛を収めて』の「第四章 在外同胞帰還促進全国協議会（全協）」に載っている資料を見ると、鍵和田玄夫宛の関東ブロック会議開催の通知ハガキや、昭和二十四年三月二十四日に行なわれた全協による厚生省引揚援護庁との折衝参加者に神奈川県代表として鍵和田玄夫の名前が記された折衝報告書がある。<sup>75</sup>さらに数多くの全協の代表者会議や関東ブロック会議の資料が載っている。こうしたことから、上部組織である全協との連携は実質的に青年同志会が担っていたものと考えられる。

### 四 学生同盟

青年同志会が足柄上郡を中心にシベリア抑留者の帰還促進運動に取り組んでいたのと同時に、同じ青年たちによる「在外父兄救出学生同盟」という組織があった。シベリアからの復員者や外地からの引揚者のため

に駅頭で世話をしたり、食事や湯茶を提供したりする奉仕活動を行っていた。

学生同盟は全国各地で組織化され、地元には神奈川県学生同盟があり、小田原駅構内に事務所を置き、三〇名近くの高校生や大学生の同盟員が活動していた。<sup>76</sup>

当時、紅陵大学（現、拓殖大学）の学生として神奈川県学生同盟で活動した宮澤正幸は「列車が小田原駅に着くと）婦人会の人達も総出で、お茶のサービスです。鴨宮駅でも婦人会が湯茶の他に、ミカンなどを提供していたと思います。小田原の高校生諸君は小田高、相洋、小田商（のちの城東）、市立高女（同）、小田原城内、新名（旭丘）、報徳（廃校）などでしょう。小田商が一番多かつたと大野武君（当時駅前錦通の佃煮店）は言っています。皆、実にまじめな生徒で、正義感と奉仕精神に燃えていました」と語っている。<sup>77</sup>

青年同志会が神奈川県学生同盟とどのように連携をしたのかわからないが、『矛を収めて』には「神奈川県学生同盟規約」と「神奈川県学生同盟昭和二十四年度事業計画」が載っている。<sup>78</sup>神奈川県学生同盟に関する他の資料は確認できないが、「規約」と「事業計画」を入手している点から何らかのつながりがあったことは確かであろう。

「事業計画」では「引揚列車・引揚者に対する援護」と「社会奉仕及文化的事業」の二点を挙げている。その具体的内容として、前者では、①列車内の慰問及煙草菓子等の接待、②復員列車内での国内県内の未帰還者の消息の調査、③横浜、大船（藤沢）、小田原各駅において引揚列車に対して湯茶、菓子、煙草等の接待、④駅頭における荷物運搬手伝い、⑤小田原駅構内に引揚げ相談所を置き留守家族との相談、を挙げている。

後者では、①留守家族に対する慰問、訪問等の援護、②浮浪者及び浮浪児、生活困窮者等の戦争犠牲者に対する援助、③傷兵院（当時は国立箱根療養所）、孤児院、療養所等に対する積極的な慰問激励、④学生及び社会人の文化向上のために有益なる音楽会・講演会等の開催、⑤平和日本再建に必要と認めたる事業、などを挙げている。

おわりに

『矛を収めて』の翻刻された資料などを通して、神奈川県足柄上郡におけるシベリア抑留者の帰還促進運動の実態を見てきた。地域から出征し、復員できずにシベリアに強制連行され収容所に抑留された同胞を救おうと、地域が一丸となつて帰還促進運動に取り組んでいたこと、さらには、その運動において青年たちの果たした役割が極めて大きかったことが明らかになった。こうした一つの地域での帰還促進運動の実態研究を積み上げていくことで、戦後の帰還促進運動の全体像がさらに明らかになるのではないかと思う。

なぜ、青年たちがその運動の主体となつたのか。男性は戦地へ狩り出されずに先輩たちを戦地へ見送つた世代であり、女性は軍需工場での勤労員で銃後を支えた世代である。先輩たちが戦死したり、復員できなかったりした事実に向かい合った時、ある種の「負い目」を感じたのではないだろうか。さらに終戦を挟んで価値観が変わり、「大人」たちの自信喪失の状況の中で、自分たち青年こそが日本の再興に貢献しようという決意したことが運動のエネルギーになつたのではないだろうか。

『矛を収めて——在外同胞帰還促進運動の記録——』は、戦後五〇年を

迎えた時に、運動のリーダーであつた鍵和田玄夫氏を中心に、自分たちが精力を傾けて取り組んだ帰還促進運動の足跡を何とか後世に残そうとまとめたものである。『矛を収めて』の刊行から二十数年が経ち、鍵和田氏をはじめ運動に関わつた多くの方がすでに亡くなられている。しかし幸運にも今回、当時一若年少年であつた伊集院兼重氏に会うことができ、当時の様子を聞くことができた。改めて当事者から話を聞くことの重要性を思い知らされた。と同時に、『矛を収めて』を入手した段階で、小論にまとめなかつたことが今でも悔やまれる。

注

(1) 『矛を収めて』の「はじめに」で、鍵和田玄夫は「改築の為転居した荷物の中からトランク二杯という量が発見されました。『私を見つけて下さい。』と叫んでいる様でした」と、五十年前の資料が出てきた時の様子を語り、「終戦直後の為紙の質も極めて悪く赤く変色し、無理をしてシワを伸したりするとポロポロの屑になってしまふのです。字も不鮮明になってはつきり分からないのです。それを判読しながら原稿用紙に書き換えたり、年代順（昭和二十一年頃から三十年頃迄の順序）に分けた資料に夫々の表題をつけ目次を作りました」と、それらの資料を整理した苦勞を述べている。

『矛を収めて』は二〇〇部作成し、「上郡内各町村役場、学校、図書館及び当時の運動関係者及びその御家族と現在の若い人達に謹んで呈上致します」（巻末の「謹呈ごあいさつとご協力のお願い」と記されている。筆者が『矛を収めて』の存在を確認できたのは、筆者所有の他には、運動関係者の伊集院兼重氏宅と、小田原市立図書館のみである。

(2) シベリア抑留の全体像を知るための、手軽に入手できる書籍として、栗原俊雄『シベリア抑留…未完の悲劇』（岩波新書、二〇〇九年）や、富田武『シベ

- リア抑留・スターリン独裁下、「收容所群島」の実像」（中公新書、二〇一六年）がある。
- (3) 吉田裕氏は「復員とは軍を戦時状態から平時状態に復帰させ軍務を解除することをいうが、この時期は、陸海軍の将兵を帰還させ、軍そのものを解体するという広義の意味で、この言葉を使用していた」（『兵士たちの戦後史』岩波書店、二〇一一年、二二～二三頁）と、敗戦後の「復員」の意味を記している。
- (4) 田中良英「中学校歴史教科書におけるロシア・ソ連記述の数的変遷——領土教育との関連性に関する考察——」（『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』COMMESS No. 25、二〇一八年）を参照。
- (5) 最近の例を挙げると、NHKテレビが令和元年（二〇一九）八月十日にBSプレミアムで、「お父さんと私のシベリア抑留」『凍りの掌』が描く戦争』を放映した。
- (6) 福田以久生編『続 まつだの歴史』（松田町教育委員会、一九八四年）。
- (7) 『南足柄市史7 通史編2 近代・現代』（南足柄市、一九九八年）。
- (8) 『小田原市史 通史編 近現代』（小田原市、二〇〇一年）。
- (9) 『神奈川県史 通史編5 近代・現代（2）政治・行政2』（神奈川県、一九八二年）。
- (10) 三省堂、一九七五年。
- (11) 小学館、一九八三年。
- (12) 小学館、二〇〇九年。
- (13) 富田武『シベリア抑留者たちの戦後』（人文書院、二〇一三年）二二六頁。
- (14) 前掲注（2）、栗原俊雄『シベリア抑留』。
- (15) 同前、一一五～一一六頁。
- (16) 同前、一三三～一三七頁。
- (17) 吉田裕、前掲注（3）書。
- (18) 同前、二八頁。
- (19) 同前、三〇頁。
- (20) 同前、三七頁。
- (21) 原書房、二〇一三年。
- (22) 『平成15年度 市立市川歴史博物館館報』（市立市川歴史博物館、二〇〇五年）に掲載。
- (23) 『平成21年度 市立市川歴史博物館館報』（二〇一一年）に小野英夫氏が山田慶太郎氏のシベリア抑留体験について行なった聞き取りが「思い出の記——シベリア抑留から帰還まで——」として掲載されている。
- (24) 厚生省社会・援護局援護50年史編集委員会監修『援護50年史』（ぎょうせい、一九九七年）。
- (25) 同前、九四～一〇一頁。
- (26) 波書房、一九八一年。
- (27) 岩波新書、二〇一五年。
- (28) 結成大会までの経緯については、「青年同志会結成大会迄の経過」（『矛を収めて』一五～一七頁）による。
- (29) 『矛を収めて』一五頁。
- (30) 『矛を収めて』一六～一七頁。
- (31) 『矛を収めて』の第十五章 同志の記録」での田辺光雄の手記（三四九～三五〇頁）。
- (32) 『矛を収めて』一九頁。
- (33) 戦後の青年団運動については、北河賢三『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』（青木書店、二〇〇〇年）を参照。
- (34) 『矛を収めて』の鍵和田玄夫の執筆と思われる「はじめに」での表現。
- (35) 国民精神総動員運動については、長浜功『国民精神総動員の思想と構造——戦時下民衆教化の研究——』（明石書店、一九八七年）を参照。
- (36) 神奈川県立小田原高等学校創立百周年記念事業実行委員会編『小田原高校百年

- の歩み 通史編』（同委員会、二〇〇二年）四〇一〜四〇二頁。
- (37) 同前、四二二〜四二三頁。
- (38) 同前、四一三〜四一五頁。
- (39) 箱根報国寮については、矢野慎一「学徒の勤勞奉仕施設だった箱根報国寮」（戦時下の小田原地方を記録する会編『市民が語る小田原地方の戦争』同会、二〇〇〇年、一三〇〜一三二頁）、及び同「三 箱根報国寮」（井上弘・矢野慎一『戦時下の箱根』夢工房、二〇〇五年、三七〜五二頁）を参照。
- (40) 前掲注(36)、『小田原高校百年の歩み 通史編』四一九頁。
- (41) 同前によれば、山口利雄が一年生の時に、最上級生の五年生は一四一名の卒業生のうち、一二人が戦死している。
- (42) 足柄平野の本土決戦部隊の駐留については、香川芳文『小田原地方の本土決戦』（夢工房、二〇〇八年）を参照。
- (43) 小田原地方の空襲については、拙著『小田原空襲』（夢工房、二〇〇二年）を、さらに同地方の終戦前の状況については拙稿「戦争末期の市民生活〜神奈川県小田原地方の昭和二十年の様相〜」（『昭和のくらし研究』第4号、昭和館、二〇〇六年）を参照。
- (44) 神奈川県の学徒勤勞動員については、神奈川の学徒勤勞動員を記録する会編『学徒勤勞動員の記録 戦争の中の少年・少女たち』（高文研、一九九九年）を参照。
- (45) 日本光学工業川崎製作所に動員されていた四年生たちは、鍵和田武男が亡くなったことも含めて、その時の体験を小田中日光会記念事業編集委員会編『ああ紅の血は燃えて…太平洋戦争下われらの小田中時代』（小田中日光会、一九九四年）にまとめている。
- (46) 「結成経過」（『矛を収めて』四七頁）による。
- (47) 『矛を収めて』四四頁。
- (48) 『矛を収めて』四五〜四六頁。

- (49) 家族同盟の「決議」（『矛を収めて』四六〜四七頁）より。
- (50) 『矛を収めて』の二七〜三九頁に一〇一通の「入会申込書」が翻刻されている。
- (51) 「神奈川県在外同胞引揚促進大会要綱」（『矛を収めて』一〇九頁）
- (52) 『矛を収めて』五一頁。
- (53) 前掲注(33)「戦後の出発」で、「未復員家族・遺家族を招待しての村民慰安演芸会や、引揚者援護・厚生援護資金募集などを趣旨とする演芸会がしばしばおこなわれている」（九二〜九三頁）と指摘している。
- (54) 『矛を収めて』二二頁。
- (55) 『矛を収めて』二〇七頁に掲載。
- (56) シベリア抑留者の間で歌われていた楽曲。昭和十八年（一九四三）に陸軍上等兵として満州にいた吉田正が作曲したものが原曲で、抑留者の増田幸治が作詞した。『矛を収めて』では歌詞の全文を載せている（三二七頁）。
- (57) 『矛を収めて』の「第十五章 同志の記録」での小嶋光雄の手記（三四七〜三四九頁）。
- (58) スケッチ展に関する資料は『矛を収めて』の「第四章 在外同胞帰還促進全国協議会（全協）」の一八一〜一八六頁に掲載。
- (59) 前掲注(31)の田辺光雄の手記。
- (60) 『矛を収めて』一八三頁。
- (61) 『矛を収めて』一九頁。
- (62) 『矛を収めて』の「第十五章 同志の記録」での伊集院兼重の手記（三五〇〜三五二頁）。
- (63) 小金義照は明治三十一年（二八九八）に足柄上郡酒田村（現、開成町）に生まれ、小田原中学校、一高を経て東京帝国大学法学部を卒業。農商務省に入省し、戦後の昭和二十四年（一九四九）の総選挙で衆議院議員に当選。以後八回当選し、昭和三十五年（一九六〇）の第二次池田内閣で郵政大臣（西山又二『小金義照伝』通信研究会、一九七七年を参照）。



- (64) 『矛を収めて』二七五〜二七八頁。
- (65) ポツダム宣言の条文については、山田侑平訳、共同通信出版センター編『ポツダム宣言』を読んだことがありますか?』（共同通信社、二〇一五年）を参照。
- (66) 前掲注(62)の伊集院兼重の手記。
- (67) 令和元年（二〇一九）九月四日、筆者は神奈川県大磯町の伊集院兼重氏の自宅を訪ねて、青年同志会の活動について聞き取り調査を行なった。
- (68) 日本健青会の前身は満州から引揚げた旧建國大学学生が結成した学生互助会から発展した健青倶楽部であり、昭和二十四年（一九四九）八月十五日に大会を開いて日本健青会に改称している（前掲注(13)『シベリア抑留者たちの戦後』一三七頁）。なお、日本健青会の活動については、林雅行『かりだされる子どもたち…中曽根「教育臨調」と青少年健全育成運動』（柘植書房、一九八四年）の第二章「日本健青会の系譜」で詳しく論じている。
- (69) 注(67)と同じく、伊集院兼重氏への聞き取り。
- (70) 前掲注(31)の田辺光雄の手記。
- (71) 『矛を収めて』の「研究部記録」（二八一〜三〇二頁）。
- (72) 『矛を収めて』二三五頁。
- (73) 『矛を収めて』の「第十五章 同志の記録」での北村重輝の手記（三三二〜三五四頁）。
- (74) 「在外同胞帰還促進全国協議会参加団体名簿」（『矛を収めて』一四九頁）。
- (75) 『矛を収めて』一六三頁。
- (76) 筆者の手元には、宮澤正幸氏から提供された神奈川県学生同盟の同盟員の集合写真（昭和二十三年十二月に撮影）があり、二七名（男子二〇名、女子七名）が写っている。
- (77) 宮澤正幸「神奈川県学生同盟について」（『市民が語る小田原地方の戦争』戦時下の小田原地方を記録する会、二〇〇〇年）。
- (78) 『矛を収めて』一二七〜一二八頁。

著者プロフィール

井上弘（いのうえ・ひろし）昭和三十年（一九五五）神奈川県生まれ。立教大学大学院文学研究科史学専攻（日本近現代史）博士前期課程修了。元静岡県熱海市立第一小学校長。

現在、小田原地方研究会代表。戦時下の小田原地方を記録する会事務局長。著書『小田原空襲』『知られざる小田原地方の戦争』（夢工房）、共著『戦時下の箱根』（夢工房）、『小田原市史 通史編 近現代』（小田原市）、『帝都と軍隊』（日本経済評論社）、『近現代日本の戦争と平和』（現代史料出版）など。